

ピアスでのかぶれ、アトピー……

専門医と学校が連携

皮膚科医が小中高校に出向き、ピアスなどで肌がかぶれる「おしゅれ障害」について話したり、アトピー性皮膚炎の子供に対応したりする取り組みが広がっている。国も皮膚科、精神科、産婦人科などの医師と学校の連携を進める事業を始めた。

東京都武蔵野市の私立成蹊高校で先月、1年生320人を対象に「健康講座」が開かれた。講師の東京都皮膚科医学会会長、岡村理栄子さんが、ピアスでただれた耳たぶをスライドで示すと、生徒たちから「うわ」と声が上がった。

岡村さんは「高校生の肌は未成熟なので金属にかぶれやすい。一度かぶれると金属アレルギーに一生悩まされる。ピアスは大人になってからの方がいい」と話した。高校生の関心の高

い化粧やヘアカラーが、皮膚に及ぼす影響についても分かりやすく説明した。講座終了後、生徒たちが書いた感想文からは「友達同士の情報だけで化粧などをするのは危険」「皮膚への影響を調べて判断していきたい」など、真剣に受け止めた様子が見えられた。学年主任の岡田るみ子教諭は「おしゅれに関心ある年ごろなので、教師が注意

しても聞き入れないこともある。その点、専門家の科学的な話は、説得力があり、素直に受け入れるようです」と話す。



皮膚科医の岡村さん（左端）は、積極的に学校に出向き、子供たちと話す機会を作っている（東京都武蔵野市の成蹊高校で）

小中高校などには「学校医」をおくことが、学校保健法で定められているが、内科や耳鼻科、眼科の医師が務めるケースが多い。しかし、化粧の低年齢化やアトピー性皮膚炎の増加など、子供の皮膚を巡る問題が増え、皮膚科医が協力するケースが目立っている。

先駆けとなった前橋市では1980年代から、市内の小中高校と養護学校に「皮膚科校医」を配置。皮膚科定期健診を行い、アトピー性皮膚炎の子供を継続して指導、症状が軽くなるなどの成果を上げている。文部科学省も2004年

度から、「学校・地域保健連携推進事業」を始めた。各都道府県教委が地域の医師会などと協力関係を結び、希望する学校に医師を派遣。その交通費や謝礼を

国が補助する。具体的には、子供や保護者の健康相談に乗ったり、出張授業や保護者・教員向けの講演会を行ったりする活動が多い。

05年度には北海道から鹿児島まで28道府県が、この事業を利用して皮膚科医を学校に派遣。皮膚科以外にも精神科、産婦人科、整形外科医などが、思春期の心や性の悩み、クラブ活動によるスポーツ障害などに対応しているほか、助産師、臨床心理士や社会福祉士が協力している県もある。

同省学校健康教育課では「子供たちの心と体の健康問題は多様化しており、地域の専門医との連携を深めてほしい」と話している。

（森谷直子）